

平成 24 年度実践者研修 in 伊勢に参加して 1

テーマ「スピリチュアルについて考える」

今回は、実際に患者さんとどのように接したら良いのか？どのような言葉をかけたら良いのか？困ることが多く経験し、またこれから緩和ケアに携わるスタッフに対してどのように伝達・指導していけば良いのか？を学ぶために参加しました。

そのためにはより具体的な内容である実践者研修は充実していました。

小澤先生の講義では、苦しんでいる人の気持ちを理解するというよりもその人にとって自分が理解者だと思って頂けるような存在になることが大事だということを学びました。基本的なコミュニケーション手技として受容や反復などは知っていましたが、理解者になるための聴き方として①反復②沈黙③問いかけがあり、それについての事例紹介・ロールプレイにより実践的に学ぶことができました。実際に行うととても難しく、頭では分かっているつもりでも目の前に患者さんがいると上手く出来ず習熟するにはより経験が必要だと思いました。また、苦しみの構造や支えとなる関係なども患者さんを理解するための手段としてとても参考になりました。

平野先生の講義では、リハビリテーションというのは生産性を向上させるということを中心に教育されてきており生産性が低下していく人に対してのリハビリテーションは困難であることに、日常、他職種との関わりの中で難しさを感じることに気付きました。しかし、緩和できることがあること、その人の存在で家族が救われること、ほんの一瞬でも苦しみを忘れることができること、患者さんから贈り物をもらうことなどができることを学びました。スピリチュアルというと宗教的なイメージが強く学びにくい分野かと思っていましたがそうではない事を学ぶことができました。より実践的な内容であり、とても充実した研修会でした。

平成 24 年 9 月 6 日

北海道済生会小樽病院 リハビリテーション室

作業療法士 山中 佑香

白井 美奈子

中園 由紀

平成 24 年度実践者研修 in 伊勢に参加して 2

神宮のある伊勢市で開催された実践者研修会に参加することができました。“スピリチュアルについて考える”というテーマが掲げられた研修会に経験乏しい立場で参加して何かに気づくことができるのかしら…？と迷いながら伊勢市へ降り立ちました。神宮の森が見えてくると不思議に気分がやや高揚しました。そしておもしろい企画に支えられ、参加者との交流に響かせられながら二日間があつという間に過ぎていきました。結論から先に申しますと、「なるほど」「そういう考えもありか」という気づきを味わうことができました。その中でも二日目の平野博先生（松阪市民病院緩和ケア病棟医師）の講義は、成書の硬い言葉をわかりやすい言葉に置き換えられたやさしい表現の中に、先生の強い思いが伝わるお話でした。先生のスピリチュアルケアとは「私が生きている事に意味・価値があると思えない苦悩を抱えながら死に向かって生きる人との関わりである」とまとめられていました。そんな先生の日常診療のモットーは『日常性を目指して』と知ることができました。具体的には、病室では病気のこと・薬のことをあまり話題とせず天候などの日常的会話をを行うように心がけられているそうです。また、入院されている方と海へドライブに出かけたり、パチンコに行ったりもされるそうです。

数々の「そういう考えもありか」と感じたお話の中でも特に心に残ったことを紹介します。例えば、緩和ケア病棟の病室で去りがたい場面をしんどく思うことはありませんか。それは医療者として良き人でいたいという自分を飾る心理の表れであろうと先生は考えられています。そのような思いはずっと持ち続けていくしかなく、そういう場面で何もできない苦しみを抱えて生き続けていく中でこそ人としてのやさしさが醸成されていくのではないか、というお言葉がありました。かなりのパワーが必要だなあと考えさせられました。強いやさしさを育てていくことが緩和ケアに携わる全スタッフに求められており、その上で専門性であろうと感じ入りました。本当におもしろいお話でした。

（ 岐阜県立多治見病院 寺下 ）